

第9回 日本がん・生殖医療学会学術集会

P-24

岐阜, 2019.02.09-10

生殖医療施設におけるがん・生殖心理カウンセリングの取り組み
ー心理支援のニーズについて検討する

橋本知子¹⁾、茅切純子¹⁾、竹林七重¹⁾、柴崎有美¹⁾、勝佳奈子¹⁾、門上大祐¹⁾、中岡義晴¹⁾、
森本義晴²⁾

¹⁾IVF なんばクリニック ²⁾HORAC グランフロント大阪クリニック

[目的]

2016年のがん生殖医療専門心理士認定開始を機に当院でもがん生殖心理カウンセリングを行っている。これまでの相談内容からがん・生殖の患者の心理支援のニーズを明らかにし、がん生殖医療専門心理士のあり方について検討する。

[方法]

2016年8月～2018年10月に当院で心理カウンセリングを受けた患者13名。相談記録より主な相談内容をカテゴリー化し、集計した。

[結果]

患者は全員女性で来談は本人のみ11名、夫婦2名。平均年齢 38.17 ± 2.41 歳。既婚8名、事実婚1名、未婚4名。全員が乳癌であった。温存方法は既婚8名が胚凍結、事実婚、未婚の5名が卵子凍結。来談時期は温存前後が10名、癌治療後の胚移植前後が3名であった。相談記録より主訴および主な相談内容を抽出したところ1名あたり2～7項目、全56項目が抽出され8カテゴリーに分類された。()内に項目数を示す。①対人関係(14)、②癌(10)、③気持ちの問題(9)、④育児希望(6)、⑤情報提供(6)、⑥仕事(5)、⑦心身不調(5)、⑧意思決定(1)。来談主訴には③気持ちの問題を挙げたものが最も多かった。項目数の多かったものを下位分類すると①対人関係はa病気について周囲に言えないというもの、b親子、夫婦といった元々の関係性の問題が危機状況において顕在化したもの、②癌はa再発の不安、b癌であることの否認や葛藤、c癌に関する個別エピソードとなった。さらに⑥仕事について半数で対人関係のa周囲に言えないという項目が重複していた。

[考察]

妊孕性温存の患者において来談主訴は気持ちの問題の相談であったが、潜在するニーズとして対人関係の問題、癌に関する語り、子供を持つことや諦めることへの葛藤などがあることが明らかになった。がん生殖医療専門心理士としてこのようなニーズにより適切な援助ができるよう専門性を充実させていくべきと考えられる。